

ボローニャ大学・当研究所主催 ウィンタースクール「防災と気候変動：日本とイタリアにおける災害リスク軽減に向けた災害経験からの学び」に参画しました (2026/3/6～15)

テーマ：東北地方太平洋沖地震・津波、福島第一原子力発電所事故、伝承活動

会場：災害科学国際研究所、仙台市新浜地区、石巻市門脇地区、名取市閑上地区、福島県浪江・双葉町方面 等

2026年3月6日～15日にかけて、ボローニャ大学の教員であるマルティーニ・アナクラウディア助教と、当研究所のゲルスタ・ユリア准教授（災害メモリー学分野）の共同企画によるウィンタースクールが、当研究所にて開催されました。本プロジェクトは、公益財団法人東芝国際交流財団、F-REI、および東北大学災害科学国際研究所・災害レジリエンス共創センターの支援を受けて実施され、両研究者による継続的な共同研究の成果の一つでもあります。

本プログラムには、マルティーニ助教に加え、ボローニャ大学のタツツィオーリ・マルティナ准教授、デ・シリオ・ミカエラ研究員、および学生10名が参加し、さらに当研究所の教員や客員研究員も加わりました。参加者は、気候変動がもたらす課題、過去の災害のいかなる側面が記憶され、あるいは忘却されるのか、そして日本の経験から得られた教訓をいかに他国に活用できるのかについて議論を行いました。

松島を訪問し、日本文化の体験および地域の歴史や観光における3.11の影響について、一般社団法人GOZAINの案内のもとで学んだ後、学術プログラムは3月9日に開始されました。当日は、東日本大震災（ゲルスタ准教授、マルティーニ助教）、能登半島地震・豪雨災害（東洋大学ショート・ジェームズ教授）、ならびに3.11の地域的影響（マリ・エリザベス准教授（国際研究推進オフィス）、齋藤由美子助手（上廣防災学寄附研究部門））に関する発表が行われた。午後には、マリ准教授の案内により仙台市新浜地区を巡り、防災、自然との共生、津波・洪水ハザードゾーンの創造的活用について学びました。

3月10日は、石巻市の震災遺構・門脇小学校にて、ハルバースタット所長によるガイドツアーから始まり、その後、門脇地区におけるフィールドワークが実施されました。また、石巻専修大学の千葉一氏と千葉直美氏（災害メモリー学分野、客員研究員）とのディスカッションを通じて、石巻復興祈念公園の整備、復興政策、防潮堤に関する議論が行われました。

3月11日は、名取市閑上地区にて過ごし、新旧閑上地区における移転政策や洪水時の避難行動について学ぶとともに、名取市震災復興伝承館において3.11の地域的影響について理解を深めました。その後、参加者は地域の追悼行事および黙禱に参加しました。

最終フィールドワーク日である3月12日は、福島県浪江町および双葉町を訪問し、東日本大震災・原子力災害伝承館を見学したほか、語り部による講話に参加し、浪江町および双葉町でのフィールドワークを実施しました。さらに、同館主催のワークショップに参加し、原子力災害およびエネルギーに関する諸問題について考察を深めました。

4日間にわたる現地調査の成果は、ボローニャ大学のマルティーニ助教、タツツィオーリ准教授、デ・シリオ研究員、ゲルスタ准教授を中心にまとめられ、14日に仙台国際センターで開催された「仙台防災未来フォーラム2026」にてポスター発表が行われました。参加した学生からは「3.11の追悼式への参列が心に残った」「浪江町に新しい店舗や施設ができていく様子が印象的だった」といった感想が寄せられ、非常に充実したプログラムとなりました。

文責：齋藤由美子（上廣防災学寄附研究部門）
ゲルスタ・ユリア（災害メモリー学分野）
マリ・エリザベス（国際研究推進オフィス）

（次頁へつづく）



現地調査後グループディスカッションの様子



福島県双葉町慰霊碑